

グローバル化の下で変動する世界における

言語生態学の課題

—持続可能性言語教育原論—

岡崎敏雄

キーワード：グローバル化 言語生態学 持続可能性 持続可能性教育
持続可能性言語教育

1. はじめに

—言語生態学における保全・育成として言語教育を展開する—

1.1 生きて活動している言葉

—言語生態学のとらえ方—

自然生態学では、生物を、環境の中で生きて活動しているものととらえている。これと同様、言語生態学では、言葉を言葉固有の環境の中で生きて活動しているものととらえる。言葉は認知、情意、コミュニケーションや、教育、社会、文化、政治、経済などの人間活動と一体化して活動している。これらの人間活動が形作っているさまざまなつながり、システムが言語の環境である。

1.2 言葉がうまく機能している状態かどうか

—言語生態—

言葉が良い状態にあつて、これらの人間活動の中でうまく機能していれば、人間生活も良い状態にあることになる。ところが言葉はうまく機能しない状態に陥ることもある。言葉が十分わからない外国へ留学することになったとする。自分の専攻の講義に出る。内容が理解できず質問もできない。言葉の認知、コミュニケーションの機能が働いていないのである。

このように「言葉がうまく機能しているかどうかの状態」を言語生態と呼ぶ。また上の留学時の外国語によるような認知、コミュニケーションの活動や、それらが形作る学習、社会環境などを、言語生態の環境、言語生態環境と呼ぶ。

1.3 言語生態学の保全・育成として言語教育を展開する

言語生態学は、言語の生態を保全・育成する形態として言語政策、言語教育を主軸とする。人間生態学の一環の学であるがゆえに言語生態学は、この保全・育成に当たって、人間生態全体を見渡した対処を不可欠としている。

本論は、人間生態全体を見渡した対処を目的とする言語生態学の保全・育成の形態として言語教育を展開するに当たってどのような原理的立場に立って進めるかを考察する。具体的には、グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題の一つとして、持続可能性言語教育原論を提示する。

2. 言語生態学に基づく「グローバル化の下で変動する世界の中で持続的な生き方を追求する言語教育」

言語生態学は、人間活動と一体化して活動している言葉の言語生態を分析、記述する。言葉がどのように機能しているか、例えば、言葉を使ってなされる認知面の活動がスムーズに機能しているか、またその機能はどのような特徴を示しているかを見る。例えばこれらの活動がうまく機能していない場合、言語生態学では、個別の要因のみを特定することで終わらない。その要因を糸口として、言語生態と、言葉の活動がなされている言語生態環境を形作っているさまざまなつながり、システムとの関係のあり方を分析、記述する。自然生態学、人間生態学共に、生態学は、関係のあり方に関する学である。言語生態学も関係のあり方を学を中心におく。

2.1 言語生態学における保全・育成としての言語教育

2.1.1 分析・記述と保全・育成の学

言語生態学は、分析・記述を踏まえた改善内容の特定とその現実化、つまり保全、育成の学である。自然生態学が自然生態系の分析・記述を踏まえた生態環境の保全・育成の学であるのと同様である。

2.1.2 人間生態学の一部を形作る言語生態学

言語の生態の改善内容の特定とその実現を含むのは、言語生態学が人間生態の学の一部をなすものであることによる。言語は人間諸活動と一体化して活動している。このため、言語の活動状態を改善するには、言語相互及び言語と人間の間の上諸問題の分析・記述を踏まえ、その解決の手立てを特定し、実現しなければならない。言語を起点とするとはいえ、その生態改善のためには人間生態全体を見渡した対処を不可欠とする。言語生態学が言語生態学として機能するには、人間生態学としての展開を不可欠とするのである。

自然生態学は、生物相互及び生物とその環境の間の上諸問題の様相を明らかにする（分析・記述）と共に、その問題を解決するための手だてを特定し実現（保全・育成）する。これと同様、人間生態学も、人間相互及び人間と環境の間の上諸問題の様相を分析・記述し、保全・育成する学である。例えば精神生態学、生態学的心理学は人間間の関係の上諸問題を分析・記述するだけでなく、そのセラピー（治療）をも学の一環としている。

2.1.3 言語のあり方のよさは、人の生き方のあり方のよさ

—言語の「福祉」と人間の「福祉」は一体—

このように、言語生態学も人間生態学を形作る学である。その特徴は、言語の状態がよい状態にあるのは言語活動のおこる人間活動がよい状態にあるからだという考え方にある。これを「言語生態と人間生態の一体化」、また「言語のあり方のよさは人の生き方のあり方のよさ」と呼んでいる。より専門的には、「言語の福祉 (wellbeing) は人間の福祉 (wellbeing)」と、福祉 wellbeing という語を用いて説明している。

2.1.4 生態学と個別科学の違い

—生態学は「つながり全体」に注目する—

このように生態学はいずれも自然、人間、言語の「あり方」のよさの状態をとり上げ、それをよい状態にするための手立てを考え、実現することを旨とする学である。その場合、「あり方」として、個々の生物、人間、ことば、やそれに関わるコト、モノに注目して、個別の要因をさぐり、その解決を考えるのではない。この点が、生態学が、他の個別科学と違う点である。代わりに、生態学は「あり方」として、個々の生物、人間、ことばやそれに関わるコト、モノの「それぞれ同士及びそれらのつながり全体」に注目する。これは生態学が「関係」の学であることによる。

2.1.5 「それ自体に問題がある」vs. 「関係のあり方に問題がある」

生物なら生物、人間なら人間、ことばならことば、その生態を分析して問題があったとする。その時、生態学は、その生物自体、人間、ことば「自体に問題がある」、というように取り上げる対象を「まわりから切り離して」考えない。例えば、生物と、その生物の家族や同種生物、他種の生物、水、食料、森林、湖沼、海、日光など、つながりの上でおきていることをまず徹底して見て行くことからはじめる。「その生物の棲息(せいそく)する世界はどうなっているか」「どんなつながりをもって広がっているか」「そのつながりとその生物個体はどうつながっているか」を見て行く。そして問題点を特定する。ただし関係のあり方の上での問題点を中心に特定する。他の生物と食料上のすみわけがうまく行っていない、今年は干ばつで、近くの水源が涸渇し、その生物の棲息地のいくつかの種類の植物の生育が悪いため食糧獲得が難しい、など。

自然生態学にもとづく環境教育、つまり保全・育成の場も、このようなつながりを見て行くことを徹底する。その上で生物の棲息域での人間のあり方、自然生態系への関わりのあり方を考えて行く。

2.1.6 言語生態学における保全・育成

—言語教育・言語政策—

言語生態学も同様である。

言語生態学では、保全・育成の部分は、言語教育（自国の国語教育含む）・言語政策（とその実施の諸事業）などの形で行われる。

2.1.7 「ツールとしての言語教育」vs.「内容重視の言語教育」

言語教育には、「ツールとしての言語教育」と「内容重視の言語教育」がある。「ツールとしての言語教育」とは、目標言語の能力を、何らかの目的のためのツール（道具）を得ることを目指して養成するものである。英語教育の場合なら、留学やビジネスのツールとして例えば英会話能力養成を目指す。中・高校生の受験のための英語教育もこれに含まれる。

他方、英語教育でも、英語の読み教材、リスニング教材がテーマとしている内容、例えば環境・開発・持続可能性、そのものをも教育内容とする「内容重視の言語教育」としての英語教育がある。その場合、ツールとしての英語能力の養成と合わせて行う。

本論は持続可能性を内容とする言語教育を取り上げる。

2.2 「グローバル化の下で変動する世界の中で持続的な生き方を追求する言語教育」

言語生態学における保全・育成としての言語教育では、内容重視の言語教育を重視する。その一つ、「持続可能性を内容とする言語教育」の場合は、例えば「グローバル化の下で変動する世界の中で持続的な生き方を考える言語教育」として行われる。

これが、日本語教育、英語教育、中国語教育、また国語教育として行われる。外国人に対する日本語教育なら、日本語の読み教材として「グローバリゼーションについて」「グローバル化の下での雇用について」「グローバル化の下での食糧について」などがとり上げられる。それらについて日本語で読み、聴き、時に母語を活用して考え、討論し、内省記録を書く。

その場合、単語・構文を学ぶと共に、同時に自分がグローバル化の下で、流動化する雇用を前にして、また多くの要因に依存し左右される食糧に基づく生活の中で、どう生きて行くか、を考えることを併行する。例えば、自分と共にその影響を受ける同世代人と、その状況を共に分かち合っどう生きるか、をさぐることを不可欠の目的とする。

2.2.1 専門教育との違い

—生き方を考えていく手立てとする—

他の専門科目のようにその専門そのものを極めるスキルを獲得するのが目的ではない。読み物の内容について学ぶと言っても、知識を専門教育のようにスペシャリストとなるための知識として学ぶのではない。

生き方を考えて行く手立てとするために、自分とのつながり、世界のコト、モノ、ひととのつながりを紡ぎながら、その全体像の中で考え、生き方を一つ一つ吟味して行くのである。正しい一つの答はどこにもない。問いを發し、それを導きの糸として、コト、モノ、

人のつながりを紡ぎ上げる中で、自分なりに答を形作って行くことの中にしか答がない。

2.2.2 グローバル化の下で変動する世界の中で、言葉が内実を失いつつある

出発点は、グローバル化の下で変動する世界の中で、「自分たちの言葉が十分機能していない」という点である。今声になっている言葉が、特に急速にグローバル化の加速したこの10年という短い間に、内実を失いつつあるという感覚である。象徴的には、雇用という言葉の持つ意味が従来とは違ってしまっている。それなのに、今それが何を意味するのかが分かっていないということである。

日本の場合、ほんの少し前までは、雇用とは、雇用されている者が、10年、20年あるいはもっと先の長い家族全体の人生を支える何かであった。その下で所得を得る、それで生計を立てる、結婚し、子を産み、子育てをし、家庭生活があり、退職までのライフコースがなり立っている、そういうものとして、雇用はあった。

非正規型雇用が若者（15～24才）人口の2人のうち1人にまで及んでいる。雇用とは、もはや人を一生支えてくれるとは限らない何かである。「人」の中の半分にとっては、職のつながり次第で、自分のライフコース（人生航路）がどうなって行くか展望が立たない。

2.2.3 お互いの中で言葉の内実がずれる

かつて同じ大学で学んだダンス部だった2人が話しているとする。正規社員の人と、プロのダンサーになりたくて非正規社員をしながら、ダンスの専門家養成学校に通っている人が、「雇用」ということばを使って話をしている場を考えてみよう。各自、自分の毎日の生活をベースにしてみると「雇用」の中身が違っている。相手の考えていること、感じていることを十分共有して感じあって話す基盤がゆらいでいる。これをことばの面から見ると「交わしている言葉が十分機能していない」と見ることができる。

さらに、この2人の間で食糧について話した場合を考えて見よう。職が安定している一方の人は、どちらかといえば「安全な遺伝子組み換えでない食品をどう選ぶか」など食の安全に関心がむいている方に近いと言える。他方、今月いっぱい派遣期間の終わる人にとっては、食べ物の値上がりで「何を食事からはずすか」がより切実、「昼はうどんですませます」かどうかの問題である。「雇用」の場合も「食糧」の場合も、ことばがお互いの間でずれている。

会話ではなく、新聞記事を読んでいる場合も同様である。雇用について、食糧についての同一の記事を、この2人は違う内実であるかのようにして読む。

2.2.4 人と人のつながりの変質

—「世界そのものが見えなくなる」、「生き方がちぢめられる」、「アイデンティティが切りちぢめられる」—

問題は言葉が内実を失っていること、言葉と内実がずれていることだけではない。もう一つの重要な側面は、人とのつながりも変質してしまっていて、そのことに気づかないで

いることである。人とのつながり、その下での自分たちの生き方、世界の下での自分の生き方、それが変質し、場合によって機能しなくなっていること、そしてそれに気づかないことである。「ことばは通じているもの」、「したがって人との間には通じ合えるつながりがある」と言う今までの信頼が内実を失い、ことばへの過信、誤解に変わってしまったものにと人との関係ができあがっていることである。

その下で、世界そのものが見えなくなっている。従って自分の生き方も、全体が見えなくなっている世界のもとでの生き方に切りちぢめられ易くなっている。生態学的に見れば、世界とのきわめてわずかなつながりの下で、生が形作られることになる。世界の中のコトのつながり、さらにそのコトに関わる人のつながりと切れた生き方を余儀なくされる。そして、その集大成として「自分とは何か」の捉え方、アイデンティティが切りちぢめられることになる。つまり、「セマい自分」の形で生きていくことになる。

2.2.5 言葉の「形骸化」

—想像力の縮退（1）—

このような言語の生態を、「ことばの形骸化」ということができる。「ことばの形骸化」は人の生き方のいろいろな面に波及する。自分が生きている世界についての情報はことばを通して得られる。ことばの形骸化が進むと、例えば、文字情報を読むに当たって文字づらのみを読むことを招く。想像力を働かせて読まなくなる。想像力が縮んでいる（これを想像力の「縮退」と呼ぶ）。情報の向こうにいる人、そこに起こっているコト、そこにあるモノを再生しながら世界を組み立てて読むということがなくなる。自分の生活経験の範囲内で調達できる理解のみで文字情報は処理される。同時にそのもとで「自分とは何か」についての感覚—アイデンティティ—が形作られる。

2.2.6 言葉の「融解」

—想像力の縮退（2）—

このような生態の、より極大化した状態が「ことばの融解」の言語生態である。「大学同窓同士で今の境遇がちがう程度の範囲」なら理解のために利用できる共有のネットワークもまだ多い。それがちがいがすぎると「全く言葉が意味をなさなくなる」。

「ダーウィンの悪夢」という映画がある。日本にも広汎に出回っているナイルパーチという自身の魚を養殖しているタンザニアのヴィクトリア湖の話である。ナイルパーチは日本でコンビニなどの食材として多用されている。日本はEU全体に次ぐ大量輸出先である。食料の貿易の、グローバル化の下で世界各地に輸出されるようになった。そこでこの魚の養殖が大規模に企業化されて以来、漁民たちは漁場を失い、小規模農民も土地を手放し、魚の加工労働につくようになった。ところが市場の変動による魚の売れ具合で雇用を左右される人も多くいる。その子供の中に売春に追い込まれる10代の子供たちがいる。その地元民でもある宣教師は、子供に、売春はやめなさいとは言いがそれをやめればストリ

ストリートチルドレンになって飢え、食物をあさって歩くしかなくなることが分かっている。分かっていると言わざるを得ないという。これを映画としてみている側で、「売春」ということばはもはや「融けてしまっている」。このようなことばを使ってその子供たちを言うことはどうしてもできない。

子供たちの中には、実際にストリートチルドレンになっている子も多くいる。多くの子供が、養殖魚を運ぶための使い古しのプラスチックの箱を燃やして、溶け出してくる有毒のトルエンをペットボトルに詰める。明かりのない真っ暗な路上で、横になる前に友達と分け合って吸う。食べるものもない朝、目覚めたときの不安感を紛らわせるために、それを吸って目を閉じるのである。しかしこの状況を「不安」ということばでは表しきれない。

自分の子供と同じ位のその子どもたちについてのことばはどれも「融けてしまう」。その人たちに加工された魚を食べている自分でありながら、ことばのつながりを失っている

2.2.7 言葉の問題と世界のつながりの問題

—想像力が及ばない事態の中で生活し、言葉を使う—

「ことばの形骸化」、その最も極大化した状態である「言葉の融解」は、ことばのあり方のよさの最悪の事態である。これはしかしことばの側の問題、ことばの中の何かの要因の問題ではない。私たちと世界のつながりの問題に由来する問題である。変動する世界の下で、自分の使っていることばとその世界の内実がつながりを失いつつある。それは、想像力が及ばない事態のもとで、生活し、ことばを使っていることによる。これを言語生態学では、「想像力の縮退」の下にある言語生態と呼んでいる。

2.2.8 言語の生態が内実を持ったものとして形作られる場

このような形骸化・融解の下にある言語生態の状態を踏まえて、その保全・育成を言語教育の場で進めるとはどんなことだろうか。

ここでは、グローバル化の下での世界の変動にあって、各自一人一人の生活が、雇用、そのもとでの結婚、子育てその先のライフコースのゆれの下にあることを出発点とする。ゆれの下にあるほかならぬ自己にとって、変動しているその世界はどうなっているのか、その下でどちらに向かって生きて行くか、人とどのようなつながりを持って行くか、そういう自分とは何かを問いつつ、持続的な生き方を追求する。

その中で世界の中のコト、モノ、そして何より人とのつながり、そしてそれらと自分とのつながりを辿ることを通して、想像力を養成していく。そのような場を形作る中で、言葉の生態は内実をもったものとしてあらたに形作られて行くものと考えられる。

2.2.9 想像力縮退がつながりの中で起きる

「言葉の形骸化・融解」など、言葉に内実がともなわない状況や、そのもとである「想像力の縮退」の原因は一つではない。上にとり上げたグローバル化の変動の下で、変動以

前に言葉の指していた内容と、現在の内容にズレが生じているのは大きな原因ではあるが、それだけではない。つまり、これらの言語の生態、あり方のよさに問題をもたらすものが単一の要因であるとして考えることはできない。それはさまざまなつながりで起きている。

ことばの生態をこのようなものに行っているものを分析するには、「ことばの生態環境を形作っている」、「さまざまなつながり」、「システム」との関係でことばの生態を見る必要がある。このような関係を分析するのが言語生態学である。

2.2.10 言葉のあり方と認知のあり方のつながりを分析する

—言語生態学の分析—

認知との関係がその一つである。言葉の生態、つまりあり方、のよさは認知のあり方のよさとつながっている。

「言葉の形骸化・融解」、「想像力の縮退」は、「あるできごとの原因は何か一つのものである」という「単一原因、単一結果」のものの見方、認知のあり方の結果、という側面をもつ。これは、「ある問題の正しい答は一つである」というパターンの教育になれ親しんできたためというところもある。

同時に、短時間のうちに効率的に情報を読み取り、答を出すことを要求する社会、特に国際競争力の強化の下で「効率」をカギとする社会、が生み出している構造化された認知の仕方が、この「単一要因の特定」、「単一要因の除去による解決」でもある。

この認知の仕方はまた、「問いは一つ」、「答も一つ」の方法でもある。あること、ものを考えるのに、一つの問いから迫る。そして一つの答を探す。その一つはもちろん一つの「もの」、「こと」である。

2.2.11 つながりの形をしている「原因とその改善」

—「原因」は一要因ではない、つながりである、「改善」も同じ—

「言葉の形骸化・融解」、「想像力の縮退」の原因が一つでないのと同様、そのような言葉の生態の保全・育成は、認知のあり方の改善という一つの答だけではない。これらの言語生態をもたらしているのは、その言語生態の生態環境の中にあるさまざまなつながり、システムのあり方である。認知のあり方はそのつながりの一部である。従って、改善もつながりのあり方の改善という形をしているはずである。

3. 生態学的思考

3.1 単一要因思考 vs. 生態学的思考

単一要因思考—「単一原因、単一結果」のものの見方、「ある問題の正答は一つ」、「単一要因の特定」、「単一要因の除去による解決」、「問いは一つ、答も一つ」、「一つとは一つのこと、もの」の思考方法—と対照的なものの見方が生態学的思考である。

3.2 生態学的思考の定義

生態学的思考とは、第一に、できごと、現象を、多くのことがらのつながりでできていると捉える思考方法である。第二に、それは、出来事、現象を、周囲を形作る環境との間の相互交渉によって成り立ち推移していくもの、という認識に立つ。第三に、そのつながり、推移がどのようなものであるかを多面、多次元からたどり、その「つながりのあり方の形をした問題」を特定する思考方法である。第四に、その問題の「つながり方の改善」の一部を、自分も形作ることを含めて、改善のためのシステム、生態学的支援システムを形作っていくことを目指す思考のあり方である。

3.3 生態学的思考の特色

その特色は以下のようにまとめられる。

3.3.1 「関係」の分析・記述と保全・育成

生態学的思考の「生態学的」とは、生態学が多面、多次元にわたる「関係」を分析・記述し、保全・育成する学であることにもとづく。

3.3.2 単一要因思考を注意深くいさめる

現象の認識に当たっては、「単一要因による原因、結果という捉え方をしない」ことを特に重視する。そのような捉え方が、事態の把握、解決方法の特定を一面的なものに切りちぢめてしまい、見誤らせるという強い戒めを持つ。

3.3.3 自己モニター

従って、思考の途中でその都度、単一要因の把握で終わっていないか、解決方法も単一を選択でことたれりとしていないか、を常に自己看視（モニター）する。

3.3.4 コト、モノ、人のつながりを、自分なりに紡いでいく

考える対象としてとり上げている事態を形作っているコト、モノ、ひと、のつながりをできるだけ丁寧にたどり、自分なりに紡ぎあげて行く。

3.3.5 自分の生き方とつなげて事態を見る

とり上げている事態を、自分の生き方を考えることとつなぐ糸口を必ずもった上で見るように考えを進める。つまり自己との関連（レラヴェンス）に注目する。

3.3.6 事態の「本当の姿」は、自分の生き方とつなぐ時見え始める」

—「意味の発生」：「意味」の生態学的規定—

自分の生き方とつなげて見た時はじめて、外の世界、対象として捉えている事態の「本

当のすがた」が見えるという認識を重視する。それが、言葉の形骸化を解消する一つの切り口になる。自分の生き方につなげて見る時、人の事態、コト、モノのつながりが目に入りやすくなる。自分の生き方の模索とつながる時、外の世界、事態は、単なる風景であることをやめる。自分とのつながりの下にある何か、自分もそのつながりを形作る何かになるという感覚が浮かび上がってくる。それが想像力を形作っていく端緒になる。

つまり、「意味の発生」は自己の生き方（＝生態）と、対象（世界のコト、モノ、人）とのつながりを、自己を起点として紡ぐときに起こる。これが生態学的に定義された「意味」である。

3.3.7 自己を起点として、コト、モノ、人のつながりを紡ぐ、「その中で見えてくる世界とその意味、その世界のつながりを形作る自己とその意味」という捉え方

—自己と世界は互いにつながりの中にある—

事態の「本当の姿」が自分の生き方とつながる時見え始める、の根本には、「自己を起点として、コト、モノ、人のつながりを紡いでいく時、そのつながりの中で世界、とその意味、が、見えて来る」ということがある。そして同時に、その世界のつながりの一部を形作る形で自己は存在しており、そこに自分という人間の意味も形作られる。

つまり、自分とのつながりのもとに世界が見えるようになること、そのもとに自己が位置づけられることで、当初の起点では見えなかった自分という存在の意味が姿を現してくるのである。

このように、「自己（という人間）と世界は互いにつながりの中にある」、そして、「つながりのもとに見られる時、自己と世界の意味も姿を現す」と、生態学的思考では捉えるのである。

これは、言語生態学、人間生態学、自然生態学いずれでも、分析対象となることば、人、生物、そして、コト、モノの間に「関係」即ち、「つながり」を見出し、そのありようを分析・記述し、保全・育成することを学の中心とする、ことによるのである。

3.3.8 自分の視座を意識化する、それにより、他の人の視座での思考を自分とつなげる

ある事態を見て行く時、どんな「視座」から自分が見ているか、に目を向けてみる。まずは、「事態を見ている自分の視座」を意識化する手立てを自分なりに形作っていく。第一に、事態を形作っている人の視座を考えてみる。例えば、1年契約の非正規社員として働いている同世代の人は、ものをどのように見ているか。まずは、その当事者はどのような状況にあるか、そこで何を必要としているかの情報を入手してみる。第二に、別の環境で同様の事態のもとにある人はどうか。第三に、それらの人々の群像が形作っている視座はどんなものか。共通点は何か。

その上で、それと自己の視座はどう異なっているか、を考える。それによって、自分の

思考がどのような特色を持つかを捉える。他の人の視座での思考を想像し、自分のものと関連付けて見ていく。

視座が違うということは、実は別の世界に住んでいるのと同じようなところがある。自分が「これが世界だ」と思っている「世界」が、実はことの真相の半分しか見てないことも起こり得る。「ことの真相の残り半分があることに気づくと見えてくるものがある可能性もある。

3.3.9 「世界はどうなっているか」で見えてくるつながり、その中で事態を見る

事態だけを取り出してみる、というのは意外に難しいことだといえる。通常は周辺のことと合わせて見ようとする。そのための関連情報を集めて見ることになる。

しかし、ことが「自分の生き方とつなげて見る」となると、まだこれだけでは心もとない。「自分の生き方」がすっぽり入っている世界という器の中にその事態を置いてみる必要がある。

生き方を決めるには、自分がどっちにむかって進んでいるのかの見当をつけることが最低限必要とされる。そのためにはある程度世界を見渡す見晴らしの良さが必要である。世界は大筋のところ、こんな具合に拮がっているくらいが見渡せる所までは到達しておくことを要する。「どっちに向かっているかはかごかきに聞いてくれ」では、今時、先々どうなっていくか分からないだろう。

そうなると、おのずとその器を手に入れる必要が出てくる。そこで、「始まりはその器を手にする事」になる。

通常は、その器は自前のものしかない。他から提供されるものは、手がかりにはなる。しかし、「自分の」生き方向きには、できていない。いわば手作りのものを作り始めることが必要とされる。

そこで、「世界はどうなっているか」の問いの下に、自分の関心事を起点として、世界に広がるコト、モノ、人のつながりをつなぐことから始めることが必要となる。

その上で初めて、取り上げる事態を世界のつながりの文脈（コンテキスト）の中に置いて見るが必要となる。一言で言えば、生き方とつなげて何かの事態を見るという作業は、必ず併行して世界のつながりを紡いで行く作業を必要とする。

この際、つながりの作業を省くと、単なる知識しか手に入らない。そういう類の知識は役に立たない、だけでなく肝心なことを見誤らせるものになる。

3.3.10 解決の姿、形はつながりの形をしている

対象を含めた世界の「コト、モノ、人の新たなつながり方」を考えていくことが解決の姿、形を明らかにしていく基盤であると捉える。言い換えれば、解決の姿、形もつながりの形をしているものであるという認識に立つ。つまり、「解決の姿、形がある単一原因の除去の形をしている」というイメージを注意深く修正していくことを意識する。

3.3.11 自分も新たなつながりを形作る

つながり方が変わること、その新たなつながりを自分も何らかの形で形作ることを視野に入れて考える。新たなつながりを自分も形作ること事態の改善のための自己及び他の人のための、自他支援システムが形作られていくという認識の下で思考を進める。

3.3.12 生態学的な支援システム

そのようなシステムは、つながりが変わることを通して形作られるとする点で、生態学的な性格をそなえる、との認識に立つ。

4. グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題

4.1 言語の生態における「貧困」

—世界の変動に及ぶことができなくなっている想像力、言語生態の現状—

先に見たように、グローバル化の下で急速に変動している世界の中で、人間生活を支える言語活動が十分機能しない状況が起きている。その形が「言語の形骸化」と「言語の融解」という事態であった。

これらは基本的には、グローバル化の変動によってこれまで当然とされてきた事態が当然でなくなり、代わりに起きている事態がどのようなものであるかについて想像力が及ばない、ということに起因していると言うことができる。

先に述べたように、雇用・所得・家庭生活・子育てなどの、従来使われてきた言葉の形が、現在の内実とズレると併行して、人の中での異なりも起こっている。これらの言葉の現在の内実であっても、例えば異なる雇用形態の下で働く者同士の間では、「雇用」という言葉が示す「内実の世界」は大きく異なっている。正規社員なら、それは一生単位の世界であり、非正規社員ならそれはせいぜいが三年間の有期期限単位の世界である。

互いに各自の「世界」だけを見て生活する。他の「世界」を見ずに生活する。その意味で、実際の世界の半分だけを見て生活するため、他の世界は見えていない。言い換えれば、ある「視座」から世界を見るため、他の世界が見えない。要するに、お互いに異なる「視座」の下で、異なる「世界」を見て生活していくことになる。

異なる「視座」の下で、異なる「世界」を見て生活していく中で、人と人のつながり、そして何より自己と人のつながりが見えなくなる。

その下で、(各自の「世界」だけの外に広がる) 世界そのものが見えなくなる。自分の生き方も、各自の「世界」だけの中に切りちぢめられる。「自分とは何か」、アイデンティティ、も各自の「世界」だけに住み、その中だけに生きる「私」を形作るものとして「狭く」捉えられることになる。

このようなコト、モノ、人のつながりが見えないこと、その下での想像力、言語の生態は、それ自体が持っている問題にとどまらず、人がどのように生きていくかの「(ことばを

通してその背後にある世界とのつながり、関係をかたち作りながらなされる) 生き方を考える基礎が揺らいでいる」ことを示している。

従って、言葉のあり方のよさ、そしてこの場合はそれを支える想像力の問題は、ただちに人の生き方のあり方のよさに直結していると言える。つまり、言葉のあり方のよさが揺らいでいる現状は、人の生き方のあり方のよさが揺らいでいることに直結している。この点で言葉のあり方のよさ、「言語生態の福祉」、は人の生活のあり方のよさ、「人間生態の福祉」と一体のものである。

言語生態学では、このように、言語の生態がよい状態でない状態を、言語を支える様々な機能が十分に機能していない、「機能の剥奪状態」と捉え、言語の生態における「貧困」と呼んでいる。

すなわち言語の「貧困」とは、「言葉の機能が剥奪されている状態」を指す。

現代における言葉の状況は、この意味で言語生態の「貧困」が「想像力の十分働かない状態」にあるという形で進んでいると捉えることができる。

4.2 言語生態学における保全・育成としての言語教育が目指すもの

—人間生態上の課題を考える過程を辿りながら、言語の生態の内実を回復する—

4.2.1 言語生態の「貧困」の保全・育成の場としての言語教育

言語生態学は、言語の生態を記述・分析しそれに基づいて保全・育成する学である。グローバル化のもとで変動する世界の下では、そこに住む一人一人の人間に起こっているこのような言語生態の「貧困」の状況を分析・記述し、それに基づいて保全・育成することが課題となる。

4.2.2 「言語の生態のあり方のよさは人間生態のあり方のよさ」の見方

—人間生態上の課題をたどりながら、言語の内実を回復する—

その場合、上に見たように、言語の生態のあり方のよさは人間生態のあり方のよさとつながっており、また逆も同様であるという言語生態学の見方から、現代の世界がどうなっており、そこでどのような生き方をすることが持続可能な生き方なのか、という人間生態上の課題を考える過程をたどりながら、想像力の保全・育成を図ることを通して、言語の生態の内実を豊かに回復していくという形で「貧困」の保全・育成の過程を進める。

4.2.3 言語生態学の課題

：想像力を「言語生態系、人間生態系、自然生態系の間をつな. もの」としてよみがえらせていく

—「言語—人間—自然」三者の間のトータル・エコロジーの追求—

「想像力の縮退」とそれに基づく言語生態の「貧困」、及びそれが世界観や行動基準観、他者との人間関係観、アイデンティティ観に及ぼしている影響を踏まえた上で、どのよう

な保全・育成を行っていくか、それが言語生態学の課題だと言える。

具体的には、以下の課題がある。第一に、世界の事象、そこにあるコト、モノ、人のつながりを自分との関わり（レラバンス）を糸口として紡ぎ合わせ、そこに浮かび上がってくる相互依存の広がり捉えていく。第二に、その下でどのような生き方を模索するかを様々な糸口、例えばそこで生きることのリスク、そこで見出すことのできる幸福、価値などの言葉で個人によって定義されている、現実の生き方の手がかりとする様々な糸口、を紡ぎ合わせながら生き方を探っていく。第三に、その下で人とのつながりをどのように持っていかを探る。そして第四に、それらを総合してどのような自己の像を形作っていくかを考えることである。

これらを通して、想像力を、言語生態系、人間生態系、自然生態系の間をつなぐものとして甦（よみがえ）らせていくことを追求していくのが以下の取り組みである。これを広く捉えれば、それは、言語—人間—自然三者の間の「トータル・エコロジーの追求」の取り組みである。

5. 結び

本論は、人間生態全体を見渡した対処を目的とする言語生態学の形態としての言語教育を展開するに当たってどのような原理的立場に当たって進めるかを考察した。具体的には、グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題の一つとして、持続可能性言語教育原論を提示した。

今後の課題として、本論の考察に基づき、想像力の保全・育成の構造を明らかにする必要がある。本論でみたように、想像力の問題とは即ち、言語生態系と、人間生態系、自然生態系との関係のありかたの問題である。「関係」とは双方向性のものである。その問題の保全・育成は、本論で辿った言語生態系から人間生態系へと向う方向の保全・育成と、逆方向、人間生態系、自然生態系から言語生態系へと向う保全・育成の両者を構造とするものでなければならない。即ち、トータル・エコロジーの追求の具体像を形作るものである。

【参考文献】

- 岡崎敏雄（2005）「言語生態学に基づく言語政策研究」『筑波応用言語研究』12, 1-14
- 岡崎敏雄（2007）「持続可能性を追求する日本語教育—その基礎としての言語教育における生態学的アプローチ」『筑波大学地域研究』28, 67-76
- 岡崎敏雄（2008）「持続可能性とその要としての言語教育のためのカリキュラム論—アクロスカリキュラムのデザイン—」『文藝言語研究』53, 17-32